大学院における教育プログラム実態調査結果

１　調査の概要

①　趣旨

大学院における教育プログラムの内部質保証の実態・課題を把握し、もって本学大学院教育の改革に資する基礎資料とする。

②　対象

1)大学院の教育プログラムの長（調査時点で３つのポリシー及びプログラム評価指針が策定されているものを単位とした。）

2)大学院（前期課程・後期課程・4 年制博士課程）の学生（全員）

③　主な調査内容

1)教育プログラム長

３ポリシーの適切さ、カリキュラムの適切な実施に係る状況　等

2)大学院生

ディプロマポリシーに関連する授業の経験、学修成果に対する認識　等

④　調査方法

・オンラインによるアンケート

⑤　実施時期

1)教育プログラム長：令和 3 年 12 月～令和 4 年 1 月

2)大学院生：令和 3 年 12 月～令和 4 年 3 月

※いずれも督促期間を含む

⑥　回収状況

1)教育プログラム長　54 件（100%）

2)大学院生　487 件（23.5%）

2. 調査結果のポイント

2.1 教育プログラム長

全体として、3ポリシーの記述については適切であるとの認識がうかがえるものの、これを実質化し、プログラムを適切に実施・改善するための具体的な取り組みは途上にある。

（設問に即した結果のポイント）

以下に、各設問に即した結果のポイントを示す。本資料では、全体の結果に着目し、記述している。

3ポリシーの記述とその実質化

DP 関連

・人材育成目標の記述については、94.4%と大半のプログラムが、「当該プログラムの特色を示しつつ、学問分野や社会の人材養成のニーズ等に応えていることが分かるような記述になっている」と回答。

・その一方で、「人材育成目標について、社会の人材養成のニーズ等を反映させるため、社会（修了生の就職先・進学先や自治体・関係団体など）に対してアンケート調査やインタビュー調査を行っている」のは3割に満たない(25.9%)。

ＣＰ関連

・教育課程編成に係る記述については、大半のプログラムが、「DP に定める学修成果を獲得できるように整合性をもたせた記述になっている」と回答（98.1%）。

・一方、「ＣＰの記載内容通りにカリキュラムが実施されているか検証しているプログラム」は 33.3%と 4 割に満たない。「授業科目について、ＤＰ との対応関係を明確に定めて科目を配置している」のは、「専門的知識を身に付けるための科目」で 66.7%、「学際的な幅広い視野を身に付けるための科目」で 59.3%であった。「ＤＰに定める学修成果を評価している（or 予定している）」プログラムは 64.8%と 6 割台半ばに留まった。

ＡＰ関連

・「入学者選抜方法」について、大半のプログラムが「それぞれの評価方法において、どのような能力を重視するかを具体的に記述している」(94.4%)、「求める学力を適切に評価することができる方法になっている」(98.1%）と回答。

・その一方で、「適切に入学者を選抜できているかどうかを検証している」との回答は 3 割に留まった（31.5%)。

シラバス、授業改善等

・シラバス関連では、「全ての授業科目でシラバスを作成している」のプログラムは 85.2%に留まった（現在は 100%であることを確認済み)。「シラバスの内容をチェックする組織的な仕組みがある」プログラムは現状では 42.6%と半数に満たない（ただし、ＦＡを踏まえると、現在、仕組みの整備途上にあるプログラムも一定以上と推測)。

・「授業評価として学生対象のインタビューやアンケート等を行なっている」プログラムは、一部の授業で実施している場合も含めて 3 割台半ばに留まる（35.2%)。「大学院における授業改善のための取り組み（FD 研修会、授業の相互参観、問題意識や現状把握のための情報交換会等)」行なっているプログラムは 29.6%と 3 割に届かなかった。

2.2 大学院生

○DP 各領域の授業での修得と経験度合い、シラバスの詳細さとシラバス通りの実施、プログラムのおすすめ度合いはどの研究科も高い傾向にある。一部の設問で相対的に低い研究科もあるものの、概ねポジティブな回答である「全く～ない」「あまり～ない」への回答は少ない)。得点換算すると、全ての設問で 3 を上回っていた（4 件法であり、中間は 2.5 となる)。

○中でも保健学は、ＤＰ各領域に対応する授業の経験度合いが高く、カリキュラムが DP と整合性があるように編成されていることが伺える。一方、シラバスの詳細さや、これに即した授業の実施状況に関しては、他研究科と比較すると低い研究科がある。

※ 回答者数が 487 であること。さらに研究科間で回答数のばらつきが大きいことから、解釈や一般化には留意する必要がある。

（設問に即した結果のポイント）

各設問の結果を得点換算した結果のポイントを示す。なお、DP 各領域の修得度合いと経験度合いについては、各領域名の右に学生全体の値を記載した。

DP 各領域の修得度合い

知識・理解(3.36)：保健学が相対的に高い水準である(3.47)。
当該分野固有の能力(3.34)： 教育実践学が少し低めの傾向か(3.20)。
汎用的能力(3.35)：現代社会文化(3.44)が相対的に高い水準である。
態度・姿勢(3.49)：医歯学 (3.58)と現代社会文化(3.58)が相対的に高い水準である。

ＤＰ各領域の経験度合い

知識・理解 (3.40)：保健学が高く (3.63)、自然科学が比較的低めである(3.34)。
当該分野固有の能力 (3.43)： 保健学が高く(3.65)、自然科学が比較的低めである(3.39)。
汎用的能力(3.35)：保健学が高く(3.65)、自然科学が比較的低めである(3.30)。
態度・姿勢(3.41)：保健学が高く(3.63)、自然科学が比較的低めである(3.35)。

シラバスは詳細か/授業はシラバス通りに実施されているか

・全体はそれぞれ 3.21、3.30 であったが、これに対して、教育実践学が低めである(両設問とも 3.00)

所属プログラムをおすすめできるか

・全体は 3.25 であったが、これに対して医歯学(3.37)、保健学(3.41)が高めである。